炎じゃわめぐ　- 棟方志功 -　　2023.11.5.

棟方志功「弁財天」

10 月 31 日国立近代美術館にて棟方志功（1903 - 1975）の作品をゆっくりと見ることができました。津軽出身のアーティストですから、身贔屓もありますが、何と言っても津軽の風土から生まれる情念のような生々しい雰囲気が感じられるのです。棟方志功の作品はあちこちで見かけることができます。版画（板画）ですから、「摺り」が可能で、本物の迫力を感じられるところが魅力です。

津軽凧絵

津軽の人が子どもの頃から馴染んでいる祭り「ねぷた」の姿、凧、メンコなどの絵は「錦絵」が原型です。見栄を切るような勇壮さ、生き生きとした色気の艶やかさ、粘り強い生命力が感じられる美です。絵姿の中にそれを感じ取る時、血が「じゃわめぐ(騒ぐ)」のです。棟方志功の描く人物の姿もここから生まれ、錦絵の手法、即ち、板(版)画を用いたのでしょう。（「炎じゃわめぐ」とは棟方志功に関するミュージカル題名です。）

棟方は佐藤一英（1899 - 1979）の古事記を詠んだ詩「大和し美し」に感動し、その物語を板(版)画絵巻（下図）にし、1936 年国画会展に出品しました。それを民藝運動の創始者である柳宗悦（1889 - 1961）に高く評価され、画壇デビューを果たしました。

大和は国のまほろば／たたなづく青垣／山隠れる／大和し美し／倭建命／黄金葉の奢りに散りて沼に落つれば／鋺（もが）くにつれて底の泥／その身を裹（つつ）み離つなし・・・・
われもまた罪業重くまといたる身にしあれば／いかでか死をば遁れ得む／されどわれ故郷の土に朽ちざる悲しさよ（以下略）

棟方は引き続き、「空海頌」(右図)、「東北経鬼門譜」などを表しました。日本の神話、民衆の信仰心、土着の民話への愛着、敬意が並々ならないと感じました。魂の世界で、問い、求める人の心、苦しむ情念を思い、棟方の血が騒いだのでしょう。そういう人間の哀しさ、悲しさも美しい、という人間讃歌にあふれていると感じました。
棟方は近眼で視力も弱かったそうですが、板に目をこすりつけるようにして、無我夢中で彫る姿は「じゃわめいて」いるようで、精力的です。作品も津軽の錦絵を飛び出て、躍動しています。棟方の板(版)画には彼ならではの命、歌があり、世界の棟方となって、愛されていると感じます。

「二菩薩 釈迦十大弟子」

「基督の柵」

「耶蘇十二使徒屏風」